

私は岩手大学の技術職員として、そして読者とは技術的には遠い、岩手では数少ない機械部門の技術士として”ものづくり”に関わる実習指導や研究装置の設計加工、その他に学生生活動の技術指導をしている。現在、大学では新型コロナ感染防止策として、授業は基本Web上で行い、実習は3密を防ぐなどの対策をしながら行っている。実習等は「さわる」ことで学び感じる事が多いものだが、今年は内容も若干簡素化せざるを得ない。建設関係の研究活動も支援しており、例年7月は8月末に行われる鋼橋模型製作コンペに向けて学生が製作し始め、部材加工、溶接を手取り足取り指導している時期なのだが、コロナ禍で中止となった。この他にも多くの学生イベントが中止となり、授業・研究・就活なども苦労している様子で学生からは寂しさや疲れをマスク越しでも感じられる。

話変わって昨年9月までの一年間、私は神奈川県の研究社に出向し宇宙関連の装置の試作に従事した。出向時の首都圏はオリンピックとラグビーW杯に向けての建設ラッシュ、溢れかえる外国人観光客と、どこでも活気を感じた。しかし、電車や新幹線は常に満席で、帰省で盛岡に着いた時には安堵と寂しさを感じていた。仕事では、ゼネコンの宇宙開発に興味を持ちつつハヤブサ2のニュースを脇目に、経験したことが無い困難な加工課題を多々抱えた。

金属の加工は、鉄を削れば熱くなる、音が変わる、切り屑の色が変わるなど、五感で得られた情報と経験をもとに機械や工具をあしらう。それは料理に近い。食材や調味料、調理器具、そして腕。課題解決のためにパソコンを開いても書籍を見ても家庭料理のレシピはあるが、ミシュランレシピは無い。素材もスーパーには無い。経験に乏しい私は週末も展示会や講習会、勉強会に足繁く通いヒントを探した。やはり肌身で感じる生の情報量は圧倒的だった。「百

聞は一見に如かず 百見は一考に如かず 百考は一行に如かず…。「うごく」が容易で有ることが首都圏のメリットと感じた。そんな中、あるイベントの場に学生が多くいた。「サークルで役立つと思って、実際触って一流のテクニックを盗みに来た」と言っていた。「盗む」とはその人の意思があり、そのものに価値がある。若い人の「うごく」に感服を覚える一言だった。

出向から戻った直後から台風やコロナ等の多くの禍に直面している。この半年で私の周りはWeb会議やオンラインでのセミナーが当たり前になり、岩手に居ながら画面上で得られる生の情報は大幅に増えたが、我々の仕事で重要な「さわる」・「うごく」などの行為は社会的に遠慮され、それに伴う情報の収集と提供が難しくなった。情報発信も岩手の課題と感じていた。以前、あるセミナーの主催者から「岩手はコト消費の時代でありながらSNSやWebでの周知効果が低く、紙媒体が必須」との指摘を頂き、私も感じていた。しかし、首都圏のイベントなどで得られるような機会が少なくなった今、広大な岩手が繋がる事で大きく飛躍するチャンスがあることを示しているのだと思う。

私は今、学生によるスポーツ器具の開発を技術指導している。当初は岩手チームの活性化を目的にしていたが、岩手の競技者からの協力が得られずにいた。しかし、学生が他の大学にサンプルを広めた所、口コミでいつしか国内の実業団からサンプル依頼を受ける程になった。技術が地域の枠を飛び出した事で魅力的な活動と評価される事になった。魅力的な岩手、そして大学にする上での何かヒントを学生から頂いたような気がする。明日には一変するような激動な令和2年の半年が過ぎた。向こう半年先はどうなっているのか期待と不安を感じながら岩手に貢献できるよう技術士の責務を果たしたい。